

街道を歩く

慶龍寺と十団子の由来



峠にあった地藏尊ここに移される。本尊延命地藏昔この地に梅林院という寺があり住職に腫物ができ小僧に膿血を吸わせたところ味を覚え、街道の旅人を食べる鬼になったという。この難を救おうと野州素麺谷の地藏菩薩が僧の姿で現れ、旅姿の鬼に向かって、「お前を成仏させようとしてきた、正体を現せ」という。2丈もある大鬼になった。お前の通力はたいしたものだ「出来るだけ小さい物になってみる」というと小さな粒になったのでそれを杖で突くと十粒の玉になった。僧はお前は仏になったと言って呑みこんでしまったと言う。それ以来鬼の災いがなくなり、里人は地藏尊を祀り十団子を災難除けのお守りにしたという。

境内に許六の句碑「十団子も小粒になりぬ秋の風」

お羽織屋(石川家)



茶屋本陣、明治天皇小休所跡碑
秀吉が小田原攻めの時ここで休息。馬の脊の取替えを注文、あるじ石川忠左衛門は脊3つを差出し、残り一つで戦勝を祈願しますと言う。これは縁起がよいと小田原へ。戦勝の帰りに立ち寄り、褒美に羽織を与え、又忠左衛門の願いのこの地の諸役を免除する。後に家康も羽織をみて茶碗を与えたという。羽織、茶碗今も拝観できる。(お羽織屋のしおり)

西行笠掛けの松、西住の墓

西住は西行が佐藤義清の頃の家臣で共に出家。師西行と旅の途中、天竜川を渡ったとき西行に乱暴をした男を西住が懲らした。西行は雲水にあるまじき行為と西住を破門。形見にと笠と筆跡残して一人旅立った。西住は後を追って岡部まで来たが病に伏し、辞世歌「西へ行く雨夜の月やあみだ笠影を岡部の松に残して」を西行からもらった笠につけて亡くなった。帰途、西行はこの御堂で休む。堂に掛かっていた笠を見つけ西住の死を嘆き悲しみ「笠はありその身はいかに なりぬらむあはれはかなき天の下かな」と詠まれて立ち去る。



大旅籠柏屋

宿筆頭の大旅籠屋。天保7年(1836)建築の山内家。5代良吉以降は旅籠と質屋を営む。問屋、宿役人を勤めた、岡部宿の名家。国登録有形文化財。



東海道遠江・駿河：02丸子—宇津ノ谷峠—岡部

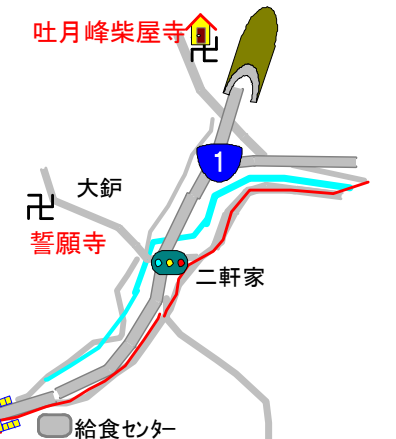


誓願寺(臨濟宗)

建久年間(1190-99)に源頼朝が両親の供養のため創建天文年間(1532-55)焼失。信玄再建。境内に豊臣家、家臣片桐且元夫妻の墓がある。且元は方広寺鐘銘事件で秀頼の使者として駿府の家康に面会すべく東下時ここを宿舎とした。家康の策略で会えず、淀君の不信をかい失脚。大阪城を出る。関ヶ原で東軍に着くが程なく病没。坪内逍遙の戯曲「桐一葉」は且元の苦悩を描く。



吐月峰柴屋寺



宇津ノ谷の町並み
峠中ほどから



道の駅

横添

十石坂観音

駿府宝台院の末寺、最林寺があったころ寺に徳川家より十石の扶持米が与えられたことから十石坂といわれた。明治になり寺は廃寺。観音堂だけ残る境内に、「西行あんぢぶつ、せんざゑもんくわんをん西行山最林寺」の碑



宇津ノ谷峠

東海道の難所の一つ天正18年(1590)秀吉が小田原攻めの時大軍を通すために開いた軍道。近世に正式なルートとなり参勤交代などにも利用された。それ以前は在原業平の「伊勢物語」で知られる「鶯の細道」が利用された。

峠は河竹黙阿弥作「鶯紅葉宇都谷峠」の舞台

主家尾花家のための百両の金策に失敗して江戸に帰る伊丹重兵衛。姉菊が吉原に身売りしてこしらえた百両を身に付けて上京する座頭の文弥。昨夜丸子の旅籠で泊まり合わせ文弥の金を狙って失敗した護摩の蠅の堤婆仁三。同宿した旅籠から文弥の頼みで重兵衛が寂しい峠まで送るが重兵衛は文弥の金が欲しくなり文弥を殺し金を奪う。それを仁三に見られる。やがて鈴ヶ森で重兵衛は仁三を殺し、自分も死ぬ顛末。

五智如来像

元は近くの誓願寺(廃寺)にあった。かつて田中城主内藤紀伊守に口のきけない姫がいた。姫が誓願寺の五智如来に願を掛けたところ願いがかなり話が出来るようになったという。密教で五智のおのおのを成就した五如来(金剛界五仏)大日如来(法界体性智)、阿しゅく如来(大円鏡智)宝生如来(平等性智)、阿弥陀如来(妙觀察智)不空成就智(成所作智)

